

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	RIZA Noer Arfani (りざ のー あるふぁに)
○学位の種類	博士 (国際関係学)
○授与番号	甲 第 1221 号
○授与年月日	2018 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	Regional Value Chains and the Japanese Automotive Production Network in Southeast Asia (日本企業による ASEAN 自動車生産ネットワーク構築と地域ヴァリューチェーン(RVC)の変化)
○審査委員	(主査) 大田 英明 (立命館大学国際関係学部教授) 中川 涼司 (立命館大学国際関係学部教授) 竹野 忠弘 (名古屋工業大学大学院社会工学教育専攻 経営システム分野准教授)

<論文の内容の要旨>

①論文の構成

本論文は、ASEAN 経済共同体の形成に伴う加盟国間の貿易自由化の中で、日本企業が東南アジア諸国の拠点再編し、企業内国際分業を進めている実態について、ASEAN 域内での統計上の付加価値の上昇を、ミクロレベルでの企業の生産ネットワーク活動の変化と結びつけ証明しようとする研究である。

第 1 章において理論的背景となる Global Value Chain (GVC) の基盤に立っている従来の Global Production Networks (GPN) に代わる新たな概念として企業の戦略に基づき部品メーカーとの関係をより詳細に説明する概念である GPN2.0 の解説が行われ、関連文献の紹介より、先行研究と本論文との違いが明らかにされた。これに続き、第 2 章では、マクロレベルの貿易動向の分析において、TiVA (貿易付加価値: Trade in Value-Added) を用い、域内の生産体制の再編を論じている。さらに第 3 章および第 4 章では、ミクロレベルでトヨタを中心とした日本の自動車産業の ASEAN での戦略的生産配置と現地生産の変化の動きを検証している。第 5 章では ASEAN での日本の自動車産業の Regional Value Chain (RVC) の今後の変化の見通しを述べ、結論では、地域的な生産体制の変化と課題を提示している。

②論文内容の要旨

本論文ではマクロレベルでの TiVA などの統計の変化の実態を検証すべく、日本の自動車産業の地域再編の影響や効果が示されている一方、ミクロレベルで、トヨタを中心としたセットメーカーや部品メーカーの現地生産の変化の動きが豊富な文献および実際のインタビューなどを通して確認されている。特に注目される点は、①最新の日本を含むアジアにおける貿易を国際貿易商品分類 (SITC) 別に分析し、貿易面での付加価値の変化がどのような形で現れているかを検証したこと、②ミクロレベルで日本の自動車メーカーが東南アジアへの生産移管の進展に伴いどのような車種の変化や戦略上の変化があったかを詳細に分析したこと、および③生産配置の工程間分業の時系列的な付加価値関連についての議論において、従来の「スマイルカーブ (smiling curve)」を修正・変形させた新たなモデルを図式化し表そうとしたことである。

これまで一般的であった世界的生産分業に関する GPN 及び最近のダイナミックな生産・貿易の変化を反映したものとして提示された GPN2.0 の概念に対して、本論文では、自動車産業の生産移管等に伴うアジア地域内での生産拠点が変化する中、日本と ASEAN (特にタイ、マレーシア、インドネシア) の間で構築された生産ネットワークである RVC とともに変容してきた過程を、マクロ統計(貿易データ)に基づく TiVA の分析に加え、ミクロレベルの実証分析により立証する試みを行っている。

<論文審査の結果の要旨>

①論文の特徴

本論文は、従来、生産高度化に伴う付加価値の生産・販売の一連の工程間の時系列的な変化を説明するモデルとして有名なスマイルカーブに修正を加えた「*Skewed* スマイルカーブ」を導入し、トヨタのアジアでの生産展開について独自の観点から説明を試みている点が大きな特徴である。すなわち、従来の「スマイルカーブ」では企画・開発に比べ生産工程に移れば付加価値が低下し、それが流通・販売に至る過程で再び付加価値が増加する U 字型のカーブを概念として説明してきたのに対し、「*Skewed* スマイルカーブ」では、従来の概念とは異なり、今日の生産現場では高度な技術が必要とされ、特に部品なども含め付加価値の高い生産工程・過程が必要とされる自動車産業について、製造工程を単純に低付加価値とのみ位置づけず、高付加価値部門をも重層的に含む構造へ変化してきていることを新たな概念を提起し検証している。

さらに、最近までの ASEAN 3 カ国 (インドネシア、マレーシア、タイ) における日系自動車メーカーの現地生産の拡大の動きを受け、各国政府に対し、新たな産業政策として、積極的に人材の交流や更なる域内分業の進展により地域全体の自動車産業や産業構造の発展を目指すために、協力体制を一層強化すべきであることを提言していることも特徴である。

②論文の評価

執筆者は本論文で数多くの先行研究をサーベイし、基本的な分析フレームワークをもとに詳細な貿易統計、データを使った付加価値分析に加え、トヨタ及びパーツメーカーなど日本の自動車メーカーの生産移管の現状を精緻に分析し、これまでのGVCやRVCの概念に加え、生産理論としてのGPN2.0の観点からマクロレベルとミクロレベルの分析を統合し、新たな生産分業体制の変化を説明しようとした点は高く評価できる。さらに、本論文は従前の「スマイルカーブ」に修正を加え、生産現場で高度技術を必要とする部品生産なども含め付加価値の高い生産工程・過程が必要とされる自動車産業の分析において、従来のような概念では説明できないものとして新たな概念を提示した試みには独創性が認められる。特に、具体的にはトヨタのアジアでの生産展開についてこうした展開を補強するものとして時系列的に付加価値の変化について分析を試みている点は評価される。この分野では英語による体系的な文献がなく、最新の動向まで取入れ、かつ分析手法を駆使した論文としての価値も評価される。

公開審査会において、上記の「Skewedスマイルカーブ」の概念について、本論文では従来型のU字型を修正するコンセプトを導入しているが、中間段階でさらに高付加価値となる逆U字型となる可能性もあるとして、外部審査委員から新たな分析の可能性を示した点に関し、高い評価がなされた。

一方、公開審査会で明らかになった課題として、①GPN2.0に関する先行研究と異なる点や発展した形態の概念をより明確にすること、ならびに、②貿易付加価値を示すTiVAをはじめとする統計分析に関しては、今後さらに詳細な分析に基づく説明を期待したいとの指摘がなされた。こうした今後の研究課題はあるものの、既存の概念に新たな知見を加えた独創性や学術的貢献などを評価し、審査委員会として、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公聴会は、2017年12月22日（金）13時から14時半まで恒心館733号教室で行われた。主査および副査は、論文審査および公聴会での質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。その上で、審査委員会は、本学学位規程第18条第1項に該当することを確認し、RIZA Noer Arfani氏に博士（国際関係学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断した。